

# 鳴海宿コース 史跡・文化財・その他散策のご案内

## ◎ 東海道 鳴海宿

徳川家康は信長、秀吉の交通政策を継承し関ヶ原の合戦の翌年慶長6年（1601）に初めて東海道の各駅に伝馬の制を布し、〈伝馬御朱印〉、53駅を設定した。鳴海宿は東西の常夜灯と木戸の間の1.8kmの街村式の町並みであった。宿場の南には扇川が流れ船着場があり、北には鳴海山なる丘が続き寺社が建ち並ぶ。宿の中心は根古屋で本陣があり、脇本陣は本町に。江戸中期に尾張藩の鳴海陣屋が置かれた。また、鳴海、大高では造り酒屋が隆盛し、江戸へ出荷していた。現在町並みは殆ど面影なく僅かに神社仏閣や芭蕉緑の塚がその名残りを留めている。なお、高札8枚と問屋場の記録文書が名古屋市博物館に保管されている。

《江戸より40番目の宿場、87里（350km）京より38里（152km）、東は池鯉鮒、西は熱田。本陣1、脇本陣2、問屋場2、旅籠68、総家数847軒、人口3,643人：天保14年（1843）》

### ① 本川浅間社（ほんかわせんげんしゃ） 【鳴海町向田】

祭神は木花開耶姫命。以前は浅間橋横で鳴海八幡宮のお旅所とともにあり、浅間堂と言われて親しまれ夏の「茅の輪くぐり」秋祭りの「狸々の追っかけ」正月の「どんど焼き」などで賑わった。平成31年（2019）3月に相生橋南に移転遷座。

### ② 復元高札場 【鳴海町本町】

江戸時代の正徳元年（1711）、宿場の中央に幕府や藩の重要法令を周知するため、大きな屋根付きの高札場が建てられ、高札が掲示された。平成21年（2009）11月に鳴海商工会・区役所・緑区ルネッサンスフォーラムが中心になって高札場が復元された。

### ③ 天神社（あまつかみしゃ）鳴海城跡・城跡公園 【鳴海町城】

庚申坂を上ると一帯は元の鳴海城の跡で大木が鬱蒼と茂り、高い石段を登る丘であったが、切り通しの広い道路ができ、東に天神社、西に城跡公園と別れたようになっている。室町時代応永元年（1394）安原備中守宗範がここにあった成海神社を乙子山に移し鳴海城を築城した。後に織田信秀の家臣山口左馬助父子が城主だったが、今川方に寝返り、桶狭間の合戦のときには今川方の岡部五郎兵衛元信が城主だった。岡部元信は合戦後に主君今川義元の首と交換で城を織田方に明け渡した。天正18年（1590）廃城となり、成海神社のお旅所として天神社が祀られた。

### ④ 雷貝塚（いかずちかいづか） 【鳴海町雷】

昭和2年（1927）鳴海小学校の北辺りで発見された縄文晩期から弥生期に至る複合遺跡で、この地方では最初に屈葬人骨、獣骨、魚骨、貝類、石器、土器、須恵器、中世陶器などが出土した。考古学研究上重要な発見があり、土器は雷式と形式名が与えられ、鳴海の貝塚遺跡の先駆となった。

### ⑤ 鳴海球場跡 現在：名鉄自動車学校【鳴海町文木】

昭和2年（1927）10月最初の試合が開かれて以後、中等野球（現高校野球）のメッカとして名選手を生み出した。鳴海球場は甲子園球場・神宮球場と共に日本三大球場の一つとして少年の憧れの球場だった。昭和6年（1931）11月にはゲーリック選手、昭和9年（1934）には全米選抜チームのベーブ・ルースが来日し、鳴海球場で試合が行われた。昭和11年（1936）には日本で初めてのプロ野球の試合が行われ、プロ野球発祥の球場として有名である。

### ⑥ 善照寺砦跡 【鳴海町砦】

桶狭間の合戦の織田方陣地。永禄2年（1559）織田信長が築いた3砦の一つで東西43m、南北29mと伝えられている。信長は合戦に先立ち兵を集め、本隊が駐留していると見せかけ、幟・旗を残して密かに桶狭間へ奇襲をかけたと言われている。公園内には鳴海紋り開祖の豊後から来た三浦玄忠夫人の碑がある。

### ⑦ 東の問屋場跡（ひがしのといやばあと） 元鳴海町役場跡【鳴海町本町】

問屋場は江戸時代宿駅制度と同時に運送、文書の送達、宿の割当てなどのために設けられた施設で、いつでも人足・馬を用意して人と荷物を運んだ。鳴海宿には初め花井に1か所であったが、後に本町にも東の問屋場が設けられ（天保期前後約30年間を除く）半月または一月交代で勤めた。

### ⑧ 曲尺之手（かねのて）鉤の手 【鳴海町本町と相原町との境】

道がクランクに曲がっている曲尺之手は全国各地にあり城下町で敵からの攻撃を防御するために、わざわざ道を曲げることが行われていた。

### ⑨ 中島橋 【鳴海町下中】

扇川に架かる橋で江戸時代には欄干付の反り橋で尾張藩の直轄で天白橋と並んで大きな橋だった。明治になって平橋にされ、昭和52年（1977）3月に今の永久橋に改築された。

### ⑩ 中島砦跡 【鳴海町下中】

丹下砦・善照寺砦と共に鳴海城を包囲するために織田信長が築いた砦で梶川平左衛門以下260名の武士を配置した。規模は長さ144m、幅90mといわれる。信長はこの砦を経由して桶狭間に向かった。砦が廃された跡に梶川の五輪塔が残されていたが今はなく、昭和2年（1927）に中島砦跡の碑が建てられた。

### ⑪ 東の常夜灯 【鳴海町平部】

文化3年（1806）宿場町の東の入口に建てられた。旅人の目印で宿や道中の安全を祈願したものであり、木戸と立場（茶屋）があった。石灯籠の四面には「永代常夜灯」「宿中為安全」「秋葉大権現」「文化三年丙寅正月」の文字が刻まれている。

### ⑫ 本陣跡 【鳴海町根古屋】

鳴海本陣は寛永10年（1633）ごろ設置され西尾家が代々勤め、幕末には下郷家が継いだ。敷地678坪、建坪は273坪で広大な建物であった。

### ⑬ 扇川土場跡と郷蔵 【鳴海町最中】

鳴海橋の下流の右岸に戦後しばらく土場という船着場からの荷揚げ場があった。江戸時代には湊があり、ここから保田（現名古屋港）まで小舟で荷（酒・絞）を運び千石船に積替えて江戸まで運んだ。岸部には尾張藩の年貢米を納める郷蔵があった。鳴海の年貢米もここから熱田堀川をのぼり三蔵へ収めた。

### ⑭ 花井の井戸跡 【鳴海町花井】

鳴海城主安原備中守宗範の家臣伊勢木右衛門の屋敷にあった井戸で桔梗の花が咲いていたので花井と言われる。名泉で江戸時代は酒造りに、最近まで飲み水として使われていた。

### ⑮ 成海神社 【鳴海町乙子山】

朱鳥元年（686）の創建。熱田神宮の東宮として鎮座し、鳴海の氏神「東宮さん」と尊崇。応永元年（1394）鳴海城の築城のため、乙子山に移転。毎年10月第2日曜日に秋の大祭で神輿・山車4台の奉納のほか日本武尊の故事によるお舟流しの神事が行われる。本殿は延宝5年（1677）建立の三間社流れ造りであったが創紀1300年に鑑み昭和61年（1986）新拜殿・参集殿・翼廊の新築と本殿・直来殿を修築し式年大祭を斎行した。境内は13,000坪あり、氷上社・源太夫社・八幡社・北野社などの末社と東宮稲荷がある。

### ⑯ 鳴海陣屋跡代官所跡 【鳴海町森下】

江戸中期天明2年（1782）尾張藩の地方役所として鳴海陣屋が設けられ、初代代官飯沼定右衛門・手代4人・足軽3人が定詰し、年貢徴収・寺社関係の行政や土木・追補、訴訟業務に従事した。鳴海代官は鳴海村から愛知郡の東南部や知多郡の東半分を治め、121ヶ村を支配し、石高7万2千石を統括した大代官であった。

### ⑰ 丹下砦跡（たんげとりであと） 【鳴海町丹下、清水寺】

織田信長が永禄2年（1559）光明寺から裏手の清水寺遺跡あたりに設けたと言われるが、はっきりした跡はない。今川方の鳴海城を抑えるために築いた善照寺・中島等の一連の砦の一つである。東西84m・南北78mで、信長公記によると水野帯刀・山口海老之丞・柘植玄蕃充らが勤めていた。

### ⑱ 鉾の木貝塚・遺跡（ほこのきかいづか・いせき） 【鳴海町鉾ノ木】

東海道に面する丘陵にあり、昭和5年（1930）野村三郎氏が発見した。貝塚は上下二層になっており、発掘された土器は縄文前期に属する。上層は爪形紋や羽状を主とし（鉾の木式）、下層はやや厚手と薄手の土器が出土している。近くの松の木に日本武尊が鉾をかけて休憩したと言われることから「鉾の木」の名がついた。

### ⑲ 大塚古墳と赤塚古墳 【鳴海町赤塚】

大塚古墳は新海池の西岸斜面に築造された円墳で直径20m。横穴式石室（玄室）は二穴連続式で、現在天井石は取り去られて側壁のみ残っている。南方50mに赤塚古墳があり石室の基底石のみが残っている。

### ⑳ 新海池（にいのみいけ） 【鳴海町池上】

江戸時代の寛永11年（1634）頃造成された12のため池の一つで、周囲約1,700mと緑区で最も大きい。新海五平治が藩の許可を得て造成したので、その名がついた。明治までその功績を讃えて受益農民が毎年稲一束を子孫の家に収めていた。今は池の周りが公園として整備され、市民の憩いの場となっている。

#### 参考資料

緑区誌・名古屋区史シリーズ緑区の歴史・緑区の史跡・名古屋の史跡と文化財・名古屋市史・愛知県地名大辞典・日本史大事典・尾張名所図会